

504
153

9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10¹⁹ 1 2 3 4 5

始



松並菊水著

開宗と親鸞

全一册

504-153



開宗
と
親鸞

松並菊水著

大正
12. 9 28
内交

緒言

立教開宗七百年の記念を迎ふるに際しこの小篇を公にす。仰いで宏恩を偲び俯して一身の多幸を思ふ、感慨禁ぜざるものあり中興上人宣はく信をこりて御禮にせよと、一篇の小著聊か師徳を彰すを得ば幸甚なり、蓋し編者の微意又これに外ならずと爾云

大正十二年一月十六日

編者識す

あゝ弘誓の強縁は多少にもまうあひが
たく、眞實の行信は億劫にもえがたした
またま行信をえはこそをく宿縁をよろこ
べ、もしまたこのたび疑網に覆蔽せられ
なば、かへりてまた曠劫を逕歴せん。まこ
こなるかな攝取不捨の眞言超世希有の
正法聞思して遅慮するここなかれ、こゝ
に愚禿釋の親鸞よろこばしきかな西蕃

月氏の聖典、東夏日域の師釋にあひがた
くしていまあふここをえたり。きゝがた
くして既にきくここをえたり。眞實の教
行信證を敬信して、ここに如來の恩徳の
ふかきここをしんぬ、こゝをもてきくこ
ころをよろこび、うるこころを嘆ずべき
なり。

(顯淨土眞實教行證文類序)

目次

一、釋尊の説法	(一)
二、佛教の傳來	(四)
三、教主聖德皇	(八)
四、念佛易行門	(二)
五、眞宗の開闢	(四)
六、宗祖親鸞	(七)
七、教行信證	(一〇)
八、祖師誕生	(二六)
九、無常迅速	(三六)
十、佛門に入る	(三九)
十一、聖道の二十年	(四三)
十二、百夜の祈願	(五五)

十三、	聖覺法印に逢ふ	………	(三七)
十四、	金剛堅固の信心	………	(四〇)
十五、	化導の九十年	………	(四三)
十六、	奇瑞の數々	………	(四六)
十七、	御同朋御同行	………	(四九)
十八、	念佛の回向	………	(五二)
十九、	行者宿報設女犯	………	(五五)
二十、	崇高なる人格	………	(五八)
廿一、	不屈不撓	………	(六一)
廿二、	惡人正機	………	(六四)
廿三、	地獄一定	………	(六六)
廿四、	煩惱具足の凡夫	………	(六八)
廿五、	他力攝取の本願	………	(七一)
廿六、	報謝大行の念佛	………	(七五)

開宗と親鸞

松並菊水著

一、釋尊の説法



我が日本ほんの佛教界ぶつけうかいに、淨土真宗じやうつしんしうなる宗門しうもんが生れ出たのは今いまより丁度七百年てうさななひゃくねんの昔むかしである。恰も今年あとかんねんは、淨土真宗開教七百年じやうつしんしうかいけうななひゃくねんの記念きねんを迎へて衷心欣快ちゆうしんきんくわいに堪えない次第たがたである。

抑佛教が、我國に三韓より這入つて來たのは、今より約千四百年前、時は人皇二十九代、欽明天皇の十三年十月であつた、佛教最初の起りは遠く三千年の古で、大聖釋尊が

印度に於て初めて唱導され、それが漸次さかんなり、遂に我が日本に傳來したのである。

釋尊の説かれた法門は、實に八萬四千にわかれて居るのであるが、要は釋迦教と彌陀教の二つである前者は自力聖道の門と稱し、釋迦牟尼如來を本尊と

仰ぎ、釋尊の如く、自ら菩提心を起こし、智識を磨き徳を積み、難行苦行を續けて、五十二段の階級を踏み越え、五十六億七千萬年其先きで漸く佛になるといふので、之は甚だむづかしい道である。そこで、これを又自力難行の門とも稱して居る。

後者の彌陀教は阿彌陀如來を本尊とするので、其の要旨は

無智にして、罪惡深重の凡愚は、自力聖道の道では佛になる事が出來ないから、小さい自力を投げ

すて、西方十萬億土にまします阿彌陀如來の大なる慈悲の力にすがれよ
 と教へたのが彌陀教で、これは極めてたやすい法門であるため、他力易行門とも稱して居る。兩道共、たどるべき途こそ別々であるが、到達すべき結果は同じであつて、これを説かれた釋尊の精神も又一つであつたのである。

二、佛教の傳來

佛教はかくして印度に發し、龍樹菩薩や天親菩薩曇鸞大師、道綽禪師、善導大師といふやうな高僧によつて、これが段々と東方に興隆し、遂ひに我が國に傳はつたのであるが、初め、時の欽明天皇は、朝廷の百官を集めて、佛教を信するか、果た又信じないかと言ふ相談を遊ばした、ところが大臣の蘇我稻目は、外國に於てさへ信仰し、功德利益のあるものなれば、我國に於ても同じく信仰して、さしつかへないと力説し、大連の物部尾輿は我が國が神國であ

る事を楯に取つて極力これに反対した、此の争ひは段々烈しくなりて、遂には政治上の問題とまでなつた、稻目の子の馬子と尾興の子守屋までが父の志を ついで相争ふに到つた、

この猛烈なる争ひのまん中へ忽然と現はれた蘇我派の有力なる味方があつた、これ誰あらふ、人皇三十一代用明天皇の御子に生れさせられた厩戸皇子後に聖徳太子とやらせ給ふた御方である。

太子は性頗る賢明にましく、熱心なる佛教の信

者にあらせられた、蘇我の馬子と共に力を協せて盛んに佛教を弘めさせられ、大阪の天王寺、大和の法隆寺を始め全国に四十六のお寺を建立し、八百十六人の僧侶、五百六十九人の尼を養成された事を見ても、如何に太子が佛教に熱心におはしましたと言ふ事が判る。太子は獨り佛教を弘められたばかりではない、大に我が國の文化を進められ、政治を改革し朝廷の顧問役として大につくされたが、寶算短かく遂に御年四十九歳にして大往生遊ばしたのである。

三、教主聖德皇

八

佛教は、かくの如く、聖德太子によつて、我が國に一大勢力を作つたのであつて、實に太子は日本佛教の開拓者であるといはねばならぬ、

推古天皇の御代になつて、上は皇室を始め下庶民にいたるまで、悉く佛教を信じ、恰も國教の如く、これを奉つるに至つたのは、ひとしく太子の力である。故に淨土眞宗の開山親鸞上人は非常に太子を崇

仰され、太子を呼ぶに「和國教主聖德皇」の名を以てせられた、其の著和讚には

「救世觀音大勢至、聖德皇ト示現シテ、多々ノ如クステズシテ、阿摩ノゴトクニソヒタマフ」

「上宮皇子方便シ、和國ノ有情ヲアハレミテ、如來ノ悲願ヲ弘宣セリ、慶喜奉讚セシムベシ」

又御傳鈔上第三段には

「シカレバ聖人後ノトキ、オホセラレテノタマハク、佛教ムカシ西天ヨリ興ツテ、經論イマ東土ニ傳ハ

九

ル、コレ偏ニ上宮太子ノ廣徳山ヨリモ高ク海ヨリ
モ深シ(中畧)儲君モシ厚恩ヲ施シタマワズバ凡愚イ
カデカ弘誓ニアフコトヲエシ、救世菩薩ハスナハ
チ儲君ノ本地ナレバ垂迹興法ノ願ヲアラワサンガ
タメニ本地ノ尊容ヲシメストコロナリ

とあつて、此の文の心佛の御教へは釋迦如來によつ
て、遠き昔西印度に興つたのであつたが、今我が
國に於て澤山な聖教を緇かせてもらうのは、偏へに
太子のお影である。もし太子が其時佛教に反對あら

せられたなら、親鸞彌陀の慈悲にあはせてもらふこ
とは出来ないのである。太子即ち救世菩薩の化身に
ましますと太子の偉大なる恩徳を慶讃されたのが、
この文の意味である。

四、念佛易行門

かくして佛教は、日々に隆興し、桓武天皇の平安
朝時代には弘法大師、傳教大師の如き高僧が生まれ
宗門も眞言、天台、三論、華嚴の如く總て八宗にわ

かれ、中にも弘法大師の眞言宗と、傳教大師の天台宗とが最も盛んな勢ひで弘まつた、これらの宗門は
 いづれもが「釋迦教」の自力聖道の法門であつた、
 この時に當つて人皇八十代、即ち高倉天皇の御
 代に當つて、淨土宗と稱する、念佛易行の宗門が興
 つた、その開拓者は當時の僧界に、智惠第一と言は
 れた法然上人であつた、法然は美作國久米の南條稻
 岡の莊に生れ、年十五歳にして、出家得度し、専ら
 天台の法門を研究したのであつたが、會々源信和尚

の「往生要集」を讀んで大に悟る所あり、直ちに自力聖
 道門をすて、念佛淨土門に入り、年四十二歳吉水
 の草庵に移り、偏へに念佛他力法門の弘通に一生を
 捧げたのであつた、

この念佛門は、取りも直さず自力をすて、他力
 易行の大道に基くと云ふ、信仰の上に於ては極めて
 たやすい宗門であつて、しかも智惠第一といはれた
 法然上人が弘めらるゝのであるから、非常な勢ひを
 以て世間に弘まつた、ために吉水の禪房は門前恰も

市をなすと言ふ有様で、當時の宗教界に取つては大革命で、又一大進歩であつたのである。

しかしながら、我が朝に於て他力易行の道に向かつて、進まれた先覺者は源信和尚であることを忘れてはならない。

五、眞宗の開闢

これから考へると、浄土眞宗の他力易行門は、法然上人によつて開宗されたことになる。かく言ふと

人は驚くであらう、他力眞宗といへば、親鸞によつて初めて開闢されたといふべきに、法然によつて興るといへば何人も不思議に考へるであらう、決して不思議はない、何となれば、親鸞自ら、師匠法然上人の立教であること、聲を大にして叫ばれて居る。和讃の上には

「智恵光ノチカラヨリ、本師源空アラワレテ、浄土眞宗ヒラキツツ、撰擇本願ノベタマフ」
又曰はく

「善導源信ススムトモ、本師源空ヒロメズバ、片洲濁世ノトモガラハ、イカデカ真宗ヲサトラマシ」と述べ又正信偈には

「本師源空ハ佛教ニ明カニシテ善惡ノ凡夫人ヲ憐愍セシム真宗ノ教證ヲ片洲ニ興シ撰擇ノ本願ヲ惡世ニヒロム」

とあるから、全く法然即ち源空上人の開宗であるといふことになるのである。

而て親鸞は自ら自己を愚禿と稱し、僧にして僧に

非ず又、俗にして俗にあらず、自身肉食帶妻し、親鸞は僧侶たる資格もあらず、衆生教化する徳もない況んや一宗開闢するが如き力があらうぞ、之れ全く師匠法然上人の智徳の致す所であると奉讃されてある、茲が親鸞の人格の偉大なる所であると思ふ。

六、宗祖親鸞

然るに吾々は、親鸞を以て其の立宗開教の祖師と仰いで居るのは、どうした譯かといへば、そこには

固より有力な理由の存するところである。

初め法然の念佛浄土門を弘むるや、他力易行の念佛者は忽ち吉水の庵室にまゐり、争ふて、之が信者ととなつた、親鸞又當時法然の弟子の一人であつた、多くの弟子の中には信仰が種々にわかれ、互に不同であつた、こゝに到ると親鸞も自己の信仰を告白しななければならぬ事になつた、そこで親鸞年五十二歳、常陸國笠間郡稻田の庵室に於て、自己の信仰を告白し併せて、師匠法然の説を自解すべく、彼の眞

宗の妙典教行信證なる六卷の聖教を著はし、上人のすゝめまします一流は、間違ひもなく、まことにこれ如来興世の正法、奇特最勝の妙典、一乘究竟の極説速疾圓融の金言、十六稱讚の誠言、時機純熟の眞教である應にしるべしと力説し、法然の説をして、大に之を發揮發揚したのであつた、
茲に於てか、我々は、親鸞を以て、立宗開教の祖師と仰ぐ所以であつて、本願寺三代の覺如上人は、親鸞を稱して開山と號し、聖人と稱された、この「教

行信證^{ぎやうしんしやう}が出来たのは、元仁元年^{げんにんげんねん}で、今から指折り數^{かず}ふると、丁度今年^{ちやうどこんねん}が七百年に相當するるのである。

七、教行信證^{けうぎやうしんしやう}

さてこの「教行信證^{けうぎやうしんしやう}」は序文を除いて六卷にわたり、第一卷の首めに「大無量壽經^{だいむりやうじゆけう}」と大書し、其下に「真宗^{しんしゆ}の教^{けう}淨土真宗^{じゆつちゆしんしゆ}」と、註釋を加へてある。して見ると真宗の教は唯この大無量壽經を弘むると言ふのである。抑大無量壽經は三千年の古、大聖釋尊^{だいせいしやくそん}が、從弟の

阿難尊者^{あなんそんじや}に對し、阿彌陀佛^{あみだぶつ}の大慈悲を説かれた經文で、此の經の大意は

「彌陀誓^{みだちか}ヒテ超發^{てうはつ}シテ廣ク法藏^{はふざう}ヲヒラキ、凡小ヲアワレンデ、エラシク功德^{くごく}ノ寶^{たから}ヲ施^{ほこ}スコトヲイタス、釋迦世^{しゃかよ}ニ出興^{しゆつこう}シテ道教^{だうけう}ヲ光闡^{くわうせん}シテ群萌^{ぐんもう}ヲスクヒ、メグムニ眞實^{しんじつ}ノ利ヲ以テセントオボシテナリ、ココヲ以テ如來^{にょらい}ノ本願^{ほんぐわん}ヲトクヲ經ノ宗致^{しゆぢ}トス」
ある。して見ると全く大無量壽經は阿彌陀如來の慈悲の總體を説いたものであつて、親鸞はこの大無量

壽經を基礎とし、釋尊の説かれた種々の教文、それ
に七祖(龍樹、天親、曇鸞、道綽、善導、源信、源空
の七高僧)の聖教を悉く集めて、諸佛稱名の願、壽命
無量の願、至心信樂の願、必至滅度の願、光明無量
の願を説いたので、其の義理は極めて深く、これを
まどめると

「願力成就の報土には、凡夫有漏の諸善萬行は、何
の役にも立たない、唯如來利他の真心によつて、
安養勝妙の樂邦に生る

と言ふ事になるのであつて、これによつて他力易行
の大道は極めて細密に説明されたので、親鸞の信仰
はこの「教行信證」によつて充分に、うかゞい知る事が
出来るのである。

第四卷に於て

「仰テオモンミレバ、釋迦ハコノ方ニシテ發遣シ彌
陀ハスナハチ彼ノ國ヨリ來迎ス、カシコニ喚ビ、
コ、ニ遣ハス、豈ユカザルベケンヤ、タゞネンゴ
ロニ法ニツカヘテ、畢命ヲ期トシ、コノ穢身ヲス

テ、スナハチ彼ノ法性ノ常樂ヲ證スベシ

と懇ろに教へ又淨土文類聚鈔の終りには

「常没ノ凡夫人、願力ノ廻向ニヨリテ眞實ノ功德ヲ

キキ、無上ノ信心ヲウレバ、即チ大慶喜ヲエ、不

退轉地ヲ得、煩惱ヲ斷ゼシメズシテ、スミヤカニ

大涅槃ヲ證ストナリ

と述べて、彌陀の他力攝取の本願の堅固なることを

示したのであつた、これによつて、いよく他力眞

宗の教行は盛んに、祖師の遺訓はますますひろまり

その恩徳の廣大なる、實に尊ぶべく又、信すべきである。

こゝを覺如上人は報恩講和記に

「他力眞宗ノ興行ハスナハチ今師ノ智識ヨリオコリ

專修正行ノ繁昌ハマタ遺弟ノ念力ヨリ成ズ、ナガ

レヲクンデ本源ヲタヅヌルニ、ヒトヘニコレ祖師

ノ徳ナリ、スベカラク、佛號ヲ稱シテ、師恩ヲ報

ズベシ

と感謝されてある。

八、祖師の誕生

二六

宗祖親鸞は俗稱を藤原氏と稱し、天津兒屋根命二十一世の苗裔鎌足公の後胤に當る、日野有範卿の子であつた、母は吉光女と稱し、源家の大将義家公の孫である。有範卿夫婦は京都の東、山科の在、日野村に隱遁して、靜かに世を送りながらも共に熱心なる佛教の信者であつた、

しかるに夫婦の中に一人の子もなく、夫婦は如意輪堂の觀音に祈願して子を願ふた、恰も承安二年五月二日の夜、吉光女夢に金色の光明三度身を廻り直ちに口に入ると夢さめて懐胎あり、高倉天皇の承安三年四月一日誕生まし、名も松若丸と稱し、父母の愛は一通りでない、長ずるに従ひ、松若丸も兩親の熱心な感化を受けてか、佛縁ふかく、年二歳の秋八月十五日の夜、父君の膝にあり珠數をかけて念佛を唱へ、四歳の二月十五日には、庭におりて、土

二七

にて佛像を作り、花を供へて頻りに禮拜された事もあつたと言ふ。

一國の大宰相藤原家の一門に生れ、朝廷に仕へて霜雪をも頂き、射山に走つて榮華をも開くべかりし人であつたけれど、茲に松若丸に取つては重ねくの大なる不幸が續いたのであつた。

九、無常迅速

松若丸が四歳の年であつた、父の有範卿はふとし

た病がもととなり、遂にあの世の人となつた、父親に先立たれた松若丸の心や如何に、悲痛の涙乾かぬ間に、又もや八歳の時、母の吉光女は之又僅かな病がもととなり遂に暎土黄泉の旅にと赴かれた。

あわれや茲に松若丸は、たよる邊もなき孤となつたのである。松若丸の小さい胸には言ふに言はれぬ悲みが重なつて、親戀しと喚べど叫べど、今はその立ち並んだ二つの墓石、前に手向ける香華も一として涙の種ならざるはない。

泣きに泣いた松若丸は、小さいながらも深く胸に世の無常を感じた、

嗚呼思へば、此の身も、何時無常の嵐に襲はるや、急ぐべきは未来の一大事、父上や母上は今はいづこにましますか、嗚や六道輪廻を迷よいおはすであらう、急ぎ自身の往生を定め、迷へる父母も濟度しなればならんと、茲に一大決心を定め、早速阿伯範綱卿に出家得度を相談した。

十、佛門に入る

驚いたのは範綱卿であつた、年齒もゆかぬ松若丸が、浮世をすて、出家得度しやうとは、範綱卿は藤原家の家柄や祖先の功績を説いて、そなたも成長のその曉は大臣大將ともなり、朝廷に仕へて榮華に暮さるゝ其の身でありながら、髪もそりこぼし難行苦行の途に進まうとは、それは年老いて後の業である思ひとどまられよと、懇々いさめたが、松若丸容易

にきゝ入る模様もない、

「明日ありと思ふ心の仇櫻」

夜半の嵐ふかぬものかわ

と詠んだ一首の歌は諸行無常の強い響きを傳へて、
範綱卿再びかへす言葉もない、範綱卿の心も大に動
き、松若丸の手を取つて押し頂き、嗚呼松若でかし
たく、背負ふて渡る子に教へらるゝ淺瀬とやら、
この伯父があやまつた、出家得度のそののちは伯父
の菩提もたのむぞよと、遂に佛門に入るべく、養和

元年三月十五日範綱卿に手をひかれ、比叡山は天台
の座主前大僧正慈圓慈鎮和尚の御許にとまゐられた
直ちに和尚の門人につらなり出家得度して、名も範
宴少納言と改め、偏に佛に仕へる身とはなつた、時
しも生年九歳の春であつた。

十一、聖道の二十年

範宴はそれより幼少ながらも一心不亂に學問、一
つを聞いては十を悟り、學びの道は日々に上達して

師匠慈鎮和尚のおぼえめでたく、範宴々々と愛せられ、智慧すぐれ、徳高く、三千の僧徒よりは近き未來の座主とまで目され、既に年二十六歳、小僧都に進み、東山聖光院の門跡とまで、朝廷の御錠が、かつたが、範宴には、今は位も祿も、金蘭の袈裟も一つとして、惜しからず、二十年にわたる自力聖道の學問も、禁慾主義の長い修行も、悉く自己の精神生活にそむけることを深く悟つて、あけくれ煩悶を胸にいただき、深い／＼なやみに沈むのであつた、

自力聖道のみ教へはいと、け高いが、世は末代機は下根、とても自力修行の門では未來への大道を眞直ぐに歩むことの叶はない、自分の力の極めて足りない、そして甚だ弱い事に目さめたからであつた、其の自覺は何ものを、もたらしたであらうか。

十二、百夜の祈願

禁慾主義の天台宗、比叡山三千の僧侶の中には、御佛に仕へる身分をも打忘れ、表面は殊勝な佛弟子

でありながら、内面は恰も外道の如く、袈裟をかけながら茶屋遊びにうき身をついやす出家もあれば、師匠の目をぬすんでは麓の女に通ふ僧侶もあつた、之を眺めた範宴は、比叡山の修行が悉く破壊的で、自己の精神生活に背ける事をいたく感じて、一時もはやく山をのがれ、ほかにたどるべき大道を求めた。いものと、時は建仁元年の春であつた、ひそかに山を下つて六角堂の観音菩薩に百夜の祈願もこめ、太子廟にも参籠した。

自己の行詰つた信仰と、深い心こころのなやみとに血みどろとなつて苦しんだ實感じつかんは、二十年の自力修行をなげすて、大なる力ちからにすがるより他に求むべき途みちのない事を自覺じかくし、罪惡深重ざいあくしんじゆうの身みであり、唯々弱よわき自己の力ちからなるに目めさめた其そのの自覺じかくが、そも／＼範宴はんえんの他力易行門たうりきいぎやうもんに走る、大なる動機どうきを作つたのであつた。

十三、聖覺法印に逢ふ

百日の、六角堂に満願のその朝であつた、京の橋の上で漂然出逢ふたのは舊知の聖覺法印であつた、
 範宴は心のなやみのあるだけを告白し、自己の救はるべき道やいかに、導きたまへ教へたまへと訴へた
 聖覺法印は手を打つて、

「範宴殿でかしたく、この聖覺もそのなやみに、
 あげくれ苦しみに悶えたが、今ははや法然様にすくはれて、罪惡深重の身を持ちながら、心に何のなやみもなく、日々に淨土の道中、幸福なのは此の

聖覺の身の上、これひとへに法然様のお影である
 そなたも早く吉水に参られよ、聖覺が禪房に御伴
 いたすであらうと

聞いて範宴喜んだ、近頃風のとよりに承れば、吉水
 とやりに法然の御坊が、念佛易行門を弘めおはす
 か、聖覺の御坊さすれば今は吉水上人の御弟子にま
 しますか、しからは範宴も吉水の禪坊にまゐりて、
 ありがたきみ法を承らん、聖覺の御坊、御手引き下
 されよと、茲に範宴は長の年月すみなれた、比叡の

山堂をあとに眺め、二十年の難行苦行もふりすて、洛東吉水、法然上人の禪室にと急いだ、範宴恰も年二十九歳の春であつた。

十四、金剛堅固の信心

聖覺法印の案内で吉水に詣ふでた、範宴の心の悶えの一杯を、きこしめされた法然上人は、いとねんごろに

「念佛往生は、もとより破戒無智のものゝためであ

る。もし佛智も廣く、戒をもたもつ身であるならば、何れの教法たりとも修行して、生死の苦海をはなれ、大發涅槃も得べきであらう、しかるに我は極惡深重の身をかゝへ、それが我身にあたはねばこそ、いま念佛して往生をば願ふのである。今の凡夫は自ら煩惱を斷つる事のかたければ、妄念又とゞめがたし、しかるを阿彌陀如来はよくしるしめして、かねて、かゝる淺間しき衆生の罪とがを除かんと、四十八願成就ましく、て、正覺の

佛となりたまふた、さればこそ他力本願と名づけたり、この道理を得わけぬれば、わが心にて、ものうるさく妄念妄想をどめんともたしなまず、しづめがたき悪しき心、みだれた心を静めんともたしなまず、唯佛の名號を念持して往生を遂ぐるので、願も入らず行もいらす、さればこそ念佛淨土門をば他力易行門と名付けたのである」と

と真宗降紹の大祖聖人が、ことに専修念佛の淵源をつくし他力易行の理致をきはめて、これを述べ給ふ

た、範宴はたちどころに、他力攝取のことはりを受得し、金剛堅固の信心を決定ましくしたのであつた。

十五、化導の九十年

茲に於て直ちに、法然上人の上足の弟子となり、名も善信と改め、師匠法然上人と共々に専ら念佛弘通の道に努められた、其の後更に名を親鸞とあらため、自ら愚禿と稱し、親鸞は身に法衣を着し、口に高大な念佛を唱へ、姿こそ殊勝に見ゆるけれど、悪

性さらにおさめ難く、心は蛇蝎の如くにて、罪惡深重のこの凡夫が、佛智不思議の願力により、この度はいよいよ願せず行せず、安養の樂邦に生を得させて頂く廣大無邊のお慈悲よと、感謝され、在家止住の惡人女人を教へて報土往生をすゝめんがため、墨の衣を身にまとひ、素足に一本の杖をたよりとし、滿九十歳の最後迄、或は關東に或は北國に、時には一椀の食も求むるに術なく、或時は寒烈身を刺す冬の夜に石を枕とし、或時は白刃の下をもくゞり、時

には流刑の苦みをも受け、一時寸時も安堵の思ひはなかつたのである、これ偶々末世の惡人女人を導かんがための艱難辛苦、思へば實にいたはしく、その苦勞やよく筆舌のつくす所でない。我々は今、上人御往生六百幾十年の末代ながら彌陀至徳の本誓を聞き得る事の出来るのは、偏へに上人化導の賜と言はねばならぬ、覺如上人は報恩講和記に次の如く、ねもごろに其の慈徳を報謝された。

「コ、ニ祖師聖人ノ化導ニヨリテ法藏因位ノ本誓ヲ

キク歡喜胸ニミチ、渴仰肝ニ銘ズ、シカラバスナ
ハチ報ジテモ報ズベキハ大悲ノ佛恩謝シテモ謝ス
ベキハ師長ノ遺徳ナリ

十六、奇瑞の數々

親鸞は一つに阿彌陀如來の化身とも稱し、或は又
曇鸞大師の再誕とも言はれてある、御傳鈔によると
「建長八年丙辰二月九日夜寅時釋ノ蓮位夢想の告云
聖徳太子、親鸞上人ヲ禮シ奉テ曰、敬禮大慈阿彌

陀佛、爲妙教流通來生者、五濁惡時惡世界中、決
定即得無上覺也。シカレバ祖師聖人は彌陀如來の
化身ニテマシマストイフコトアキラカナリ

この文は一夜上人の弟子蓮位坊が、夢想の記である
聖徳太子が上人を禮拜されてのお告げである。曰く
大慈の阿彌陀如來が、末世機應の法を弘めんがた
め、親鸞と名乗りて娑婆世界に來現まし、たの
である。世は五濁惡時惡世界とはいへ、凡夫は決
定して即ち無上覺を得るのである。

と敬禮まし／＼た、そこで覺如上人は、祖師聖人は、
全く彌陀如來の化身におはしますと仰せられたので
ある。

又常陸國の平太郎が、熊野權現に參詣した時も奇
瑞の事あり、上人の弟子入西房が上人の眞影をうつ
さんと志した時も畫師の定禪法橋が、前夜の夢に善
光寺如來の御顔を見奉り、其御顔と、今うつし奉ら
んとする上人の御顔とが少しもたがはさずとて、隨
喜の涙にむせんだとある

「ツラノ、コノ奇瑞ヲ思フニ聖人彌陀如來ノ來現ト
イフコト炳焉ナリ、シカラバ弘通シタマフ教行、
オソラク彌陀ノ直説トイヒツベシ、アキラカニ無
漏ノ慧燈ヲカ、ゲテ、トホク濁世ノ迷闇ヲハラシ
アマチク甘露ノ法雨ヲソ、ギテ、ハルカニ枯渴ノ
凡惑ヲウルホサンガタメナリト仰グベシ信ズベシ
……(御傳鈔第八段の終り)

十七、御同朋御同行

しかるに親鸞あくまで、無善造惡の凡夫であること
自覺し、在家止住の惡人女人と互に手を相たづさへ
報土往生には善人もあれ、惡人もあれ、男子あれ、女
人あれ、洩さずたすけたまふ彌陀の大願力には、一
切平等、況んや教ゆる親鸞師匠でもなく、教へらる
る衆生又弟子でもないこと、御文章に蓮如上人が

「故聖人ノオホセニハ、親鸞ハ弟子一人モモタズト
コソオホセラレ候ヒツレ、ソノ故ハ、如來ノ教法
ヲ、十方衆生ニトキキカシムルトキハ、タゞ如來

ノ御代官ヲマウシツルバカリナリ、サラニ親鸞メ
ヅラシキ法ヲモヒロメズ、如來ノ教法ヲワレモ信
ジヒトニモオシヘキカシムルバカリナリ、ソノホ
カハナニヲオシヘテ弟子トイハンゾトオホセラレ
ツルナリ、サレバトモ同行ナルベキモノナリ、コ
レニヨリテ聖人ハ御同朋御同行トコソカシヅキテ
オホセラレケリ

と仰せられて、上人自ら肉食帶妻し、かゝる淺まし
き親鸞でさへ、佛智の不思議に助けられ、たやすく

報土往生を遂ぐるのであるから、あまたの衆生も同
様だ、共に御同朋御同行だ、この導く親鸞よりも、
導かるゝ衆生が浄土の正客だ、共に手をとり合ふて
参らうぞと、悪人正機を自ら我身にひきかけ、廣く
衆生に示されたのである。

十八、念佛の廻向

親鸞は幼少より極めて孝心厚く、育てたまはつた
父上や母上は、早く此世を去られたゝめ、孝養つく

すことの出来なかつたを非常に悲まれ、もしも父上
や母上が不幸にして、六道輪廻を迷ふて居らるゝと
せば、此の松若丸は、片時も急ぎ、浄土にまゐて、
流轉の父母を往相廻向の利益にて助け救ひ申さねば
親に對しての孝養でないと思悟した、比叡山に登つ
てからも、たえず懇ろに佛事もいとなまれ、月の夜
に鳴く鳥の聲聞いては

ほろゝと鳴く山鳥の聲きけば

父かと思ふ、母かと思ふ

と詠んだ一首の和歌にも、その深い親戀しの孝心が
よくあらはされて居る。嘆異鈔には

「親鸞ハ父母孝養ノタメトテ一遍ニテモ念佛マウシ
タルコトイマダ候ハズ、ソノ故ハ一切ノ有情ハミ
ナモテ世々生々ノ父母兄弟ナリ、イズレモ、コ
ノ順次生ニ佛トナリテタスケ候ベキナリ、ワガ力
ニテハゲム善ニテモ候ハバ、コソ、念佛ノ廻向シテ
父母ヲモタスケ候ハメ、タゞ自力ヲステ、イソ
ギ淨土ノサトリヲヒラキナバ六道四生ノアヒダ、

イズレノ業苦ニシヅメリトモ、神通方便ヲモテマ
ヅ、有縁ヲ度スベキナリ」

とあつて、親鸞急ぎ淨土にまゐつたなら、いかに六
道輪廻を迷ひ、いづれの地獄に沈んでゐらるゝとも
神通方便をもつて父母を救ふ事が出来るのだから、
唯自力をすて、彌陀本願にすがるのが、何よりの
孝養である、仰せられたのである。

十九、行者宿報設女犯

家庭にありては、夫婦の間きはめて睦しく、親鸞は媛の玉日を六角堂の観音菩薩の示現と敬はれ、玉日は又親鸞を阿彌陀如來の化身と尊ばれ、互に敬ひ、互に相愛し、一生夫婦は相たづさへて、關東、北國國郡をめぐりめぐつて、惡人女人を化導遊ばされたが、玉日は年七十八歳にして遂に東國に御往生しましたのであつた。

曾つて上人が夢に六角堂の観音菩薩が上人に告命してのたまふに

行者宿報設女犯、我成玉女身被犯、一生之間能莊嚴、臨終引導生極樂文

この文の心は「我はこれ六角堂の観音であるが、この娑婆世界に女の身と生れ出て、汝と共に夫婦となり一生の間衆生濟度につくすであらう、之れ救世菩薩の誓願である」のお告げによつて、夫婦の縁を結ばれたので、故に上人が常に玉日を観音の化身と敬まはれた所以はこゝにあつたのである。

二十、崇高なる人格

曾つて山伏辨圓が、上人弘通の念佛門に仇をなさうと、或時一日常州稻田の庵室に武器引かけて押よせた。上人何の恐れ氣もなく、左右なく玄關に心地よく出むかへられたが、その温容にして福德圓滿なる氣高い、慈悲相の容貌に接しては、道の辨圓も、忽ち害心きえ失せ、反つて後悔の涙となり、遂に其場に於て上人の弟子にとなり、名も明法房と改め、

上人の最後まで側近く仕へたごある、その温容にして、無抵抗主義のうるはしき人格がありくご、うかゞはるゝのである。又日野左衛門の宅に、一夜の宿を求めたに、強慾非道の左衛門は、いたはしくも之を門前に追出し、雪は降り積つて、行くに道なく日は暮れ果て、遂に軒端に雪を褥とし、一夜を明かせられた、其の時も更に立腹もめさらず

「彌陀の五功思惟の願をよくく案づればひとえに親鸞一人がためなり」

あゝ、雪の一夜はわづかな苦み、阿彌陀如來の兆載永劫の御苦勞にくらぶれば、何のその、うれしやくと、報謝の念佛高々と唱へて、よろこばれた、その寛慈の徳が遂に、強慾非道の左衛門をして感化せしめ左衛門も佛門に入れば、悻の唯圓も上人の御弟子となり、これ又、上人の御往生まで、親しく御給仕申したとある。

又或る時、法然上人に連座して越後國へ流刑に處せられたまふたが、唯に師恩の深き事を謝し

「大師聖人モシ流刑ニ處セラレタマハズバ、我又配所ニオモムカンヤ、モシワレ、配所に趣カズバ、何ニヨツテカ邊鄙ノ群類ヲ化セン。是ナホ師教ノ恩致ナリ」

と偏に喜んで化導ましゝたのであつた。

二十一、不屈不撓

親鸞が、藤原家の名望もすて、比叡小僧都の地位も振り放ちて、無善造惡の凡夫の仲間になつて入り、

極惡深重の凡愚の味方となつて、滿九十年の最後まで、粉骨碎身の御化導は、まことに犠牲的精神の偉大なるものといはねばならぬ、此間何事も忍耐、こらえ／＼て、自分といふことは更になく、唯々多くの衆生濟度のためのみ血潮を流しての働き、忙はしき念佛弘通の中からも、教行信證を初め、澤山な聖教を著はされ、中にも「愚禿鈔」、「淨土三經往生文類」、「尊號眞像銘文」、「唯心鈔文類」の如き聖教は八十三歳から八十五六歳の老境に入られてから製作され、又帖

外和讃の如きは臨終わづか二年前に著はされた、其の元氣の旺盛にして不屈不撓の大精神は唯々敬服し奉るの外はない。

又報恩の志厚く、御製作の和讃は悉く佛恩の深き事を述べ、あらゆる師主智識の恩徳を報謝慶讃しましたのであつた。

「如來大悲ノ恩徳ハ、身ヲ粉ニシテモ報ズベシ、師主智識ノ恩徳モホテヲクダキテモ謝スベシ」(和讃)

二十二、惡人正機

親鸞は阿彌陀如來の他力本願は、ひとへに惡人正機のためであると喜ばれ、罪惡深重、煩惱熾盛の衆生を助けんがための願にてまします故、彌陀の不思議の誓願にたすけられ、往生間違ひなしと信じて、報謝の念佛を申さんと思ひたつ心の、おこる時、攝取不捨の利益にあづけしめたまふので、唯信心一つが肝要である。信心決定の上には、善もいらす惡も

恐るべからず、彌陀の本願は廣大無邊で、いかに惡重くとも如來の本願厚きが故に、親鸞に於ては唯大悲の慈願に、すがるより外に仔細なきなり、煩惱具足の我には、いづれの行をばげむとも、生死の苦海をはなるゝことのあるべからざるを、あわれみましまして、四十八願成就し給ふ本意ひとへに、惡人成佛のためなれば、惡業の親鸞こそ極樂往生の正因であるを歡ばれたのであつた。

二十三、地獄一定

親鸞が信心は、師匠法然上人より授かつたものであつて、まことに念佛は浄土にまゐる業であるやら又地獄に落つる業であるやら弟子の親鸞に於ては更に知る由がない、

たとへ、法然上人にすかされて念佛して地獄におつるとも、さらに残念も後悔もないのである。なせば、自力修行のはたらきで、佛になるべき親鸞

が、念佛申して地獄に落ちたと言ふなれば、それこそすかされてと、言ふ後悔もあらふが、親鸞は長年の月自力修行の道も辿つて見た、いかに力んで見ても、わづかな行さへ叶はんこの凡夫、地獄ならでは趣くべき方とては一つもなき親鸞が身、地獄は一定すみかぞかし、たとへ地獄に落つるとも、親鸞一人ならず、師匠法然上人も、善導大師も、釋迦如來様も、皆揃ふて共々だから、これより結構な道連れはないのである。かるが故に師匠法然のみ教へには、

ハイ／＼と唯お随ひ申すばかりである。と仰せられたのであつた。

二十四、煩惱具足

或る日の事であつた、弟子の唯圓房が上人の前にまゐつて申すには、

念佛を申しますけれど、踊躍歡喜の心がおこりませぬ、又急ぎまゐりたい心のおこらねばならん淨土へは今日こそ参らふと言ふ心もおこりませぬ、如

何したものでござりましょうか、

と尋ねたに、上人は

唯圓房左様であるか、耻かしながら親戀もその不審ありつるに、よく／＼案じ見れば天に踊り地に躍つて、よろこぶべきが、よろこばれないで往生は一定、まちがひなしと存せられよ、よろこぶべき事をおさへてよろこばせないは煩惱の所爲である。かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫よと、仰せられたることなれば、他力攝取の悲願は、かくの如き親戀

や唯圓がためなりと知られて、いよく頼母しく覺ゆるのである。

又いそぎ淨土へまゐりたき心もおこらず、いさゝか所勞のこともあれば、死なんずるやらん心細く覺ゆるも煩惱の所爲である。久遠劫の昔から、迷い迷ふた、苦惱流轉の娑婆世界は、すてがたく、いまだ生れざる安養の淨土は更に戀しくない、まことに煩惱の力の恐ろしさよ、名残れ惜しくは思へ共、娑婆の縁つきて、力なくして終る時、いよく

彼の淨土へはまいるべきである。かような淺ましき凡夫の身を、ことに憐れみ給ふが如來である。これにつけても、大悲大願はいよくたのもしく、未來往生の一段は更にまちがひないぞよ。と仰せられて唯圓は其場に歡び舞ふたとある。

二十五、他力攝取の本願

源信和尚は横川法語に

「妄念はもとより凡夫の地体なり、妄念の外に別の

心はなきなり」
 と仰せられた如く、親鸞もごより妄念の凡夫である
 煩惱即菩提、煩惱あつて初めて他力攝取の光明にお
 さめとられまゐらすので、親鸞に於ては何の心配も
 造作もない

「彌陀ノ五劫思惟ノ願ヲヨクノ案ヅレバ、ヒトヘ
 ニ親鸞一人ガタメナリケリ、サレバソクバクノ業
 ヲモモチケル身ニテアリケルヲ、タスケント、オ
 ボシメシタチタル本願ノカタジケナサヨト御述懐

候ヒシコトヲ、イマダ案ヅルニ善導ノ自身ガコレ
 現ニ罪惡生死ノ凡夫曠劫ヨリコノカタ常ニ沈ミ常
 ニ流轉シテ、出離ノ縁アルコトナキ身トシレトイ
 フ金言ニスコシモタガハセオホシマサズニ云々
 と仰せられて、罪惡生死の凡夫は親鸞一人にあらず
 善導大師も、源信和尚も皆共だ、火宅無常のこの世
 界は、よろづにつけ、皆以て一つもまことなきに、
 唯念佛のみぞ、まことにおはしますと仰せられ、正
 信偈には

「よく一念喜愛の心を發すれば煩惱を斷せずして涅槃を得るなり」

とある。さすれば彌陀の本願は、煩惱具足の凡夫のために起したまへる願なれば、善凡夫は傍客である。其の傍客たる善人往生せば、専ら正客たる惡人いかでか往生せざらんや、善人なほもつて往生す、況んや惡人をや、まことに他力攝取の本願はいよいよ間違ひなしと仰せられたのである。

二十六、報謝大行の念佛

かくの如く信心決定の上にては、彌陀の本願が惡人正機だからと言ふて、我儘勝手の振舞ひがあつてはならない、いかに四十八願の妙薬があるとなんで三毒を喰ふてはならんと、堅くいましめられた之が俗諦の要である

教行信證第一卷の首めに「謹んで淨土眞宗を案ずるに二種の廻向より一つには往相二つには還相なり」と

ある、往相とは先きに死んだ有情を、後より佛果を悟つた其者が助け救ふと言ふ意味で、還相とは、先きに佛果を得た其者が、衆生濟度に娑婆世界にかへり來る、利益を説かれたので、親鸞の還相廻向は、唯死んだ未來の濟度ばかりを言はれたのではない、信心決定の上からは、現世から人を救へよ、導けよと口をきはめて廢惡修善を説かれたのであつた、かかる上からは、攝取の光明に收めとられ、煩惱に眼さへられて、見奉らずといへども、大悲ものうきこ

となくして、常に我を照らしたまふと云へり」とあつて、光明のふところ住居、唯名號の念佛は、自身往生のためにあらず、全く報謝大行の念佛であるから、時處諸縁をきらはす念佛申せ、一人ゐて歡べば二人と思へ、二人ゐて喜べば三人と思へ、その一人は親鸞なりと、上人は臨終の最後まで、報謝の稱名懇ろに相續あらせられたのであつた。

開宗と親鸞（終り）

附

錄

御俗姓御文

夫。祖師聖人の俗姓をいへば、藤氏として、後長岡の丞相内鷹公の末孫、皇太后宮大進有範の子なり。また本地をたづぬれば、彌陀如來の化身と號し、あるひは曇鸞大師の再誕ともいへり、しかればすなはち、生年九歳の春のころ、慈鎮和尚の門人につらなり、出家得度して、その名を範宴少納言の公と稱す。それよりこのかた、楞嚴横川の末流をつたへ、天台

宗の積學となりたまひぬ、その後二十九歳にしては
じめて源空聖人の禪室にまつり、上足の弟子となり
真宗一流をくみ、専修專念の義をたて、すみやかに
凡夫直入の、真心をあらはし、在家止住の愚人をお
しへて、報土往生をすゝめまし〜けり

抑、今月二十八日は祖師聖人遷化の御正忌として
毎年をいはず親疎をきはらず、古今の行者、この御
正忌を存知せざるもがらあるべからず。之れによ
りて當流にその名をかけ、その信心を獲得したらん

行者、この御正忌をもて報謝のこゝろざしを、はこ
ばざらん行者においては、まことにもて木石にひと
しからんものなり。しかるあひだ、かの御恩徳の深
きことは、迷廬八萬のいたゞき蒼溟三千のそこにこ
えすぎたり。報せずばあるべからず、謝せずばある
べからざるものか歟、このゆゑに多年例時として、
一七日のあひだ、かたの如く報恩謝徳のために無二
の勤行をいたすところなり、この一七日報恩講のみ
ぎりに當りて、門葉のたぐひ國郡より來集、今にお

いてその退轉なし。しかりといへども未安心の行者にいたりては、いかでか報恩謝徳の義これあらんやしかの如きのもがらは、このみぎりにおいて、佛法の信不信とあひたづねて、これを聴問して、まことの信心決定すべくんば、眞實實に聖人報謝の懇志にあひかなふべきものなり、あはれなるかや、夫聖人の御往生は、年記とをくへだたりて、すでに一百餘歳の星霜をおくるといへども、御遺訓ますくさかににして、教行信證の名義、いまに眼前にさへぎり

人口にのこれり、たふとむべし、信すべし。之に於いて當時、眞宗の行者の中において、眞實信心を得せしむる人これすくなし、たゞ人目仁儀ばかりに名聞の心をもて報謝を號せば、いかなるころざしをいたすといふとも、一念歸命の眞實の信心を決定せざらん人々は、その所詮あるべからず。まことにみづに入て、あかおちすと、いへるたぐひなるべき歟。これによりて、この一七日報恩講中において、他力本願のことはりを、ねむごろにきゝひらきて、

専修一向の念佛行者にあらんことを祈りては、
 今月聖人の御正日の素意にあいかなふべし。これ
 しかしながら、眞實々々、報恩謝徳の御佛事となり
 ぬべきものなり。あなかしこく、
 千時文明九年十一月初比、俄爲報恩謝徳染翰記
 之者也。

御俗姓御文（終り）

大正十二年二月廿三日印刷
大正十二年二月廿八日發行

定價金參拾七錢

著作者兼發行者

松

並

完

廣島縣雙三郡作木村
四十四番地

印刷者

増

田

直

吉

廣島市撫屋町十二番地

印刷所

増田兄弟

廣島市撫屋町十二番地

不許複製

發行所
發賣所

廣島縣雙三郡

作木村

青年團

廣島縣雙三郡

作木村

一致協會

専修一向の念佛行者にならんには、まことに
に今月聖人の御正日の素意にあいかなふべし、これ
しかしながら、眞實々々、報恩謝徳の御佛事となり
ぬべきものなり。あなかしこ、
千時文明九年十一月初比、俄爲報恩謝徳染翰記
之者也。

御俗姓御文（終り）

大正十二年二月廿三日印刷
大正十二年二月廿八日發行

定價金參拾七錢

著作者兼 發行者 松 並 完 一
廣島縣雙三郡作木村

印刷者 增 田 直 吉
廣島市鹽屋町十二番地

印刷所 增田兄弟活版所
廣島市鹽屋町十二番地



發行所 廣島縣雙三郡 作木村 青年團
發賣所 廣島縣雙三郡 作木村 一致協會

504
157

125 11

終